

文芸

俳句

故郷の砂丘に生きる浜防風

池田 逸子

青田風里一軒の雑貨店

伊藤 敬子

子の刻に屋根叩きしや虎ヶ雨

今関満喜子

兄を呼ぶ差し出す手の中雨蛙

魚地 照子

日蝕にどよめく列島首夏の朝

江森 悦子

茗荷の子いよよに進む物忘れ

川島 通則

勤行の伽藍の中の薄暑かな

向後 寛

明け易し来し方行く末思ふ夜

越川せつ子

春の風鼻腔擦る花粉かな

小松 藤男

春耕や傘寿の腰も鋏も錆び

佐瀬 輝夫

短夜や地球自転のこと思ふ

椎名万里子

明け易しどこか鼠のいるらしく

鈴木とし子

畦道に小判になれぬ小判草

鈴木 利子

舟を寄せあやめに顔をつき合わす

玉虫 栗扇

短夜や眠気まなこの朝の卓

土屋美枝子

木積の箕伝へる里の風みどり

土屋 義昭

玫瑰の一輪咲くも嬉しかり

戸村 静華

点滴の落ちる静けさ明易し

内藤 くに

短夜の夢は半ばになりけり

西崎さち子

椎若葉にわか山に山活気つき

早川 勇

短歌

この秋の米価は如何になろうとも
緑の苗の育つは嬉し

土屋 好

蠅叩き執れば素早く身を隠す

伊藤 定男

命を守る蠅の勘繰り

伊藤 定男

限りもなく連なり何か掲げ行く

越川 福子

爆音の音すれども姿なし

鈴木 益郎

計器飛行の有様うかびぬ

鈴木 益郎

今置きしことも忘れて物探す

高梨 キヨ

八十路に入りて茫茫の日

越川 義則

五月晴空が光を振り撒きて
吾が身いつしか透き徹りあつ

八角 三枝

公園の垣根に添ゐて蔓薔薇は

紅に沙ゆ五月雨の中

鈴木まさ子

姉上のお気に召さねば吾が着ると

ジョーク言ひつつパジャマを渡す

青木 秀子

初夏のそよ風頬に受けながら

バラの花咲く園を歩めり

田崎 尚美

夜の風に吹かれ落ちしか青梅の

堅きが幾つ庭に転べり

押尾 輝子

早苗田の水面は廻りの木木写し

里の真昼は静もりゐたり

芹川 初子

処理できぬ思ひ抱へて見詰めるつ

梅花空木の真白き花を

西山満里子

音たてずひと足ひと足寄りて来る

一羽の雉子をひたに見てあつ

島田ますみ

夕暮れの波打ち際のしぶきにも

負けじとばかり鷗群れ飛ぶ

平山 芳子

母の日の慰安旅行は鶉の岬

家族揃って早出するなり

吉岡 信子

白雲の上なる藍に澄み徹る

高空を行くジェット機に乗り

斉藤つね子

こうほう 博物館 52

スマートな縄文土器

縄文土器と言えば、縄目文様を施して、取っ手や粘土紐を付けた、ごてごてした形の土器を思い浮かべると思いま

す。ここに紹介する土器は縄目文様がなく、下半分が細く

すっきりとした形ですが、こ

れも立派な縄文土器です。

この縄文土器は、大総地区

にある姥山貝塚から、畑の耕

作中に出土したもので、地元

の土屋俊彦氏から町に寄贈さ

れたものです。上半分が朝顔

のように開き、その口は五つ

の丸い山型になっています。

また、下半分はすぼまり、筒の

ようになっていますが、底は

ありません。文様は、く

びれる部分にへらで描いた斜格子線があるのみで、それ以外はへらで磨かれてすっきりとして

とした関東に多くみられます。この土器が出土した姥山貝塚は、太平洋に面する九十九里沿岸最大の貝塚で、これまでに何度か発掘調査され、縄

文時代中期（今から五千年前）から同晚期（同二千年前）ま

で栄えた遺跡であることが判

りました。姥山貝塚の近くには、東長山野遺跡や中台貝塚

など、縄文時代の遺跡が多く

分布し、この地域に縄文文化

が栄えていたことが推定され

ます。そして、このような遺

跡からは、さまざまな縄文土

器が出土しています。



▶スマートな縄文土器 (姥山貝塚出土)